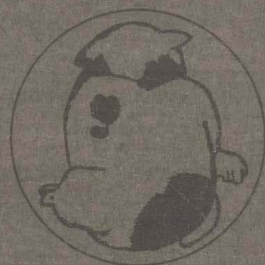


南総里見八犬伝

一

曲亭馬琴作
小池藤五郎校訂

岩波書店



南総里見八犬伝

一

曲亭馬琴作
小池藤五郎校訂

岩波書店

南総里見八大伝(一) (全一〇冊)

一九八四年一月十五日 第一刷発行 ©
一九八五年一月一日 第二刷発行

定価二三〇〇円

校訂者 小池 藤五郎

発行者 緑川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋二五五
発行所 株式会社 岩波書店

電話 〇三六五二二
振替 東京六三六四

印刷・精興社 製本・文勇堂

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN4-00-004311-0

解 説

正月頃から野に水仙の薫っている安房国は、『南総里見八犬伝』によって、一人のゆかしさを増している。私はかつてこの地に滝り、小湊・東条・滝田・富山などを歴遊したが、そこに住む人々の多くは、『里見八犬伝』の名をも、またその土地が『八犬伝』中に現れていることを知らない。誠に日本文学中の屈指の名作が、余りにも現代人とは没交渉である点を悲しまれてならなかった。

『南総里見八犬伝』は九輯、九十八巻、百六冊の老大な小説である。馬琴は四十八歳の文化十一年に肇輯五冊を出版し、七十五歳の天保十二年に第九輯の第四十六巻から第五十三巻を出版し、二十八年の歳月を経て完成した。

既に文化三年の『椿説弓張月』の前編の出版から、『旬殿実々記』(文化四年刊)・『俊寛僧都島物語』(文化五年刊)・『頼豪阿闍梨怪鼠伝』(同上)・『三七全伝南柯夢』(同上)・『夢想兵衛胡蝶物語』(文化六年刊)・『文化七年刊』・『占夢南柯後記』(文化八年刊)・『糸桜春蝶奇縁』(文化九年刊)・『皿々郷談』(文化十年刊)等の雄篇を年々に完成し、彼の師匠格の山東京伝の声望を押し、その速筆と穎才とは、馬琴と称する作者が数人あって創作するものかと読者に疑わしめた程で、読本作者

としての彼の赫々たる地位はここに確定した。これらの作品の後を受けて、文化十一年から出版し始めた『南総里見八犬伝』こそは、彼の円熟した伎倆と、渾身の努力とを傾注し得た作品、馬琴を代表し江戸文学を代表する一大雄篇であって、日本文学中の屈指の傑作である。

『里見八犬伝』の創作に苦心している間に、馬琴の家庭には多くの事件が起り、苦悩を一入深めた。文政六年に妻のひやくと息子の宗伯が病み、文政十年に馬琴自身大病に罹った。天保四年の秋頃から右眼の視力が甚だ衰えたが、勝氣の彼は相変らず創作を続けていた。天保五年に馬琴が病み、六年に宗伯が病歿した。右眼は既に失明したので、左眼を力に、この不幸中にあっても創作を続けたが、八年には聾の清右衛門が歿し、九年の春頃から左眼も翳み、今まで十一行に記した原稿は五行あるいは四行の大字でも書けず、なさけなや十一年の十一月には、ただ昼夜を弁ずるのみとなった。万策尽きて、宗伯の未亡人、わずかに文字を知るに過ぎない嫁のみに、筆を執らせ、口授して創作を続けていると、十二年には妻のひやくも歿した。かくの如くに雪虐風餐、具に辛苦を嘗め、血みどろの努力により、天保十二年八月二十日に至って『里見八犬伝』を完成した。

馬琴は博覽強記、精力絶倫、学は和漢古今に涉り、戯作者として当時の智識階級から尊敬せられていた。里見氏に関しては『房総志料』・『里見軍記』・『房総治乱記』・『里見九代記』・『北条五代記』・『甲陽軍鑑』・『本朝三国志』等から『太平記』その他の軍記物、伝説等にも拠るところが

ある。支那小説に通じ、漢籍に明るい故に、支那小説の趣向をしばしば取入れ、なかんずく『忠義水滸伝』は『里見八犬伝』の骨子をなし、『三国志』・『戦国策』などにも拠るところがある。

碌々たる戯作者中であつて、卓越した識見を有し、矜持するところが高かつた。彼は戯作の根本に勸善懲惡の教育的の重大意義を認めていた。故事来歴や物々しい筆致は、一方には銜学的の非難もあるが、実は教化的の意義と修養の該博がいぱくさとが相合した結果である。作品の構成には因果の運行を骨とし、儒教倫理と武士道とを肉とし、微に入り細を極めた趣向によって幾多の起伏を作り、義理人情の葛藤、演劇的色彩など、文章の遒豪流麗しゆうこうりゅうれいと相俟あひまって眼も綾あやなる心地がせられる。

八犬士は仁・義・礼・智・忠・信・孝・悌の八徳の各々一と、武士道の真髓とを具体化した理想的の人物であるが、これに对照せしめて惡漢・毒婦を描き、印象を鮮明にする。

『里見八犬伝』は起稿の際から相当の長編の意図をもつて立案したらしいが、これ程の長編となることは、予期しなかつたらしい。さりながら四輯・五輯と進むにつれて、喝采は前古に比なく、規模結構の雄大さも世の歡迎によって更に強調された。そして合巻・淨瑠璃・歌謡・詩・和歌・俳句などから、錦絵・絵本・双六すうろく・玩具・模様等に至るまで、その影響は認められる。

馬琴に勤王思想の有無は別としても、その結果から見る時には、忠孝の大道を嚴守する犬士を描き、仁者の政治を述べて時の民衆の大喝采を博している。これが明治維新の大業に、間接的に

貢献するところが有ることを私は認め、馬琴の教化的側面に別個の注意を払うべきであると思う。
本文庫の第一巻には、肇輯じょうしゅうと第二輯とを収録した。出版書肆しゅしは山青堂山崎平八（江戸）、画工は柳川重信、筆工は千形仲道、挿絵の彫刻は朝倉伊八郎である。

（昭和十二年一月）

凡 例

- 一、校訂には『南総里見八犬伝』の初版本を用い、校正は毎回原本に拠って厳重に行った。
- 一、読みやすくするために、左の諸点に特色を持たせたほかは、全く原本通りにして置いた。
- (1) 本文に段落を設け、詞には鉤(「」)を施し、仮名の濁点・半濁点は適宜に補った。
- (2) 冒頭の漢文の序の繫符(「」)を除き、目録は仮名交りに改めて本文中の回号に一致させた。
- (3) 本文中に和歌・詩文・その他が挿まれている場合には、それを抜出して別行とした。
- (4) 原本の文章はすべて句点(。)で切っているが、それを読点(、)・句点(。に)に分けて用いた。名詞を重ねた場合で、原文に句点がない時だけ、並列点(・)を附けて置いた。
- (5) 原本中の文字・仮名づかいの甚だしい誤謬——例えば「城平[△]等」を「城兵[◎]等」に、「聡^そ察^{さつ}叡^{はい}智^ち」の「そうさつはいち」を「そうさつえいち[△]」を「そうさつえいち[◎]」に訂正——は訂正して置いた。
- (6) 原本の仮名づかいは「亡父^{ぼうふ}」・「滅亡^{めつぼう}」・「龜篠^{かめささ}」・「龜篠^{かめささ}」等の如くに、同一の文字についてもしばしば不統一である。かかる点は、むしろ時代の仮名づかいと、作者自身の特徴とを知る上から、原本通りにした。ただし「人物一覧」には多く用いられている方を振って置いた。

(7) 馬琴の特色ある文字使用法を保存するために、極力原本通りの漢字を用いた。ただし「也」・「敷」^{なり}その他を仮名書にした。「漁夫」^{ぎよふ}の如き場合には左側の片仮名のみを削った。
リヤウシ

〔編集付記〕

旧岩波文庫版『南総里見八犬伝』全十巻(小池藤五郎校訂、昭和十二・十六年刊)を改版するにあたって左の改変をくわえた。

一、旧岩波文庫版を底本とし、国立国会図書館蔵の初版本『南総里見八犬伝』(架蔵番号別三―一〇六一二)と対校して誤植などを訂した。

一、右国会図書館本により、旧岩波文庫版で省かれていた挿絵を余すところなく補った。

一、漢字は新字体を用いたが、仮名づかいは初版本どおりとした。

一、底本で使われている異体字のうち、逃・羣・𩇑・𩇒など、いくつかを通行の漢字(逃・群・腰・胸)に改めた。

一、読みやすさの便をはかって振り仮名の一部を省略したが、人名・地名などの固有名詞はこの限りではない。

一、底本の()は原本の割注を示しているが、今回これを〔 〕に改めた。

一、各輯の総目録は訓み下し文に改めたが、本文中の回号との異同は初版本のままとした。

(岩波文庫編集部)

話の筋(第一巻の分)

〔肇 輯〕

結城の城も嘉吉元年の四月に落城し、血路を開いて相模に逃れた里見義実は、三浦から安房国に渡ろうとして、白竜が天に昇るのを見た。義実は滅亡した神余光弘の家の金碗八郎に安房の白箸河で会い、小湊の村人を率いて神余の逆臣山下定包を襲い、滝田の城主になった。光弘の愛妾の玉梓は今定包の妻になっていた。義実はこの美女の命を赦そうとしたが、金碗八郎は諫めてこれを斬ってしまった。義実は神余の旧領地を取り、安房国は一時鎮まった。金碗八郎は亡君神余光弘に対し臣下の道を全うしようとして切腹したが、いまはの際に、愛し子の金碗大輔に初めて面会し、悲しくも嬉しい気持ちで死んで行く。義実は万里谷入道静蓮の娘の五十子を娶って一女を挙げ、伏姫と名附けた。役の行者の示しを受け、仁・義・礼・智・忠・信・孝・悌の八字を彫った水晶の数珠を得て、姫は美しく成長する。義実は八房と呼ぶ犬を愛し、安西景連に囲まれ、危く落城と思われた時に、もし景連の首を取って来たなら伏姫を妻にさせる、と犬に言った。果して八房は敵将の首を銜えて帰り、里見の軍は危険を脱したので、姫は運命と諦め、八房に伴われて富山に登った。金碗大輔はこれを聞き、鉄砲を持って富山に分け入った。

【第二輯】

義実の心にいつもかかって忘れられないのは、富山の伏姫と、行方不明になった金碗大輔の身の上である。妻の五十子は伏姫を案じて重い病になった。妻の心のいじらしさに、義実も腹心の家来を従えて富山に登って行く。伏姫は八房と共に山中の洞穴に住み、日々法華經を読んでいた。不思議や姫の月経が止まった。大輔は二つ玉の鉄砲で八房を撃ったが、一弾は姫に命中した。この場へ義実も来あわせた。姫は八房の胤を受けたものではないことを証拠立てるために、守り刀で自ら腹を割く。怪しいかな、腹中から白氣が立昇り、姫の襟にかけてある八字を彫った数珠を包むよと見る間に、数珠の八個の親玉は光を発して八方に散り、姫は身の潔白さを証拠立てて死んだ。大輔はこの場で出家して、大法師と号し、八個の珠を捜すために行脚に出た。

結城の城が落ちた際に、父の匠作から足利家の宝刀の村雨丸を渡された番作は、妻の手束と共に旧領地の武蔵国大塚に帰り、世を憚って犬塚と姓を改めた。番作の腹ちがいの姉の龜篠は悪漢の墓六を夫とし、墓六は大塚の村長になっていたが、この夫婦の不義を憎んで番作は交際しなかった。番作には信乃が生れ、墓六夫婦は浜路を養女にした。墓六はうまく言いがかりを付けて村雨丸を奪おうとしたが、番作は奸計の裏をかいて自殺し、信乃は幼少のために墓六の世話を受けるようになった。墓六の下男の額藏は由緒ある者の孤児である。彼は犬川莊介義任と名乗り、信乃と兄弟の義を結んだ。

主要人物一覧（第一巻の分）

里見治部大輔義実
さとみ じぶのたいふ よしざね

杉倉木曾介氏元
すぎくらき そけいしげもと

堀内蔵人貞行
ほりうちろうんとさだゆき

安西三郎大夫景連
あんさいさぶろうだいふ かげつら

麻呂小五郎信時
まろのこごろうのぶとき

神余長狭介光弘
じんよながさのすけみつひろ

山下柵左衛門定包
やましたさくざ えもんさだかね

玉梓
たまづさ

仙木朴平
そまき ぼくへい

洲崎無垢三
すさきのむくぞう

金碗八郎孝吉
かなまわりはちろうたかよし

五十子
いさらこ

伏姫
ふせひめ

義実の老臣。
ゆうき の かしん。

結城氏朝と共に結城の城に立籠った里見季基の子。本篇の主人公。

義実の老臣。

義実の老臣。

安房郡 館山の城主。里見義実、に滅ぼされた。

朝夷郡 平館の城主。里見義実、に滅ぼされた。

長狭郡 滝田の城主。逆臣山下定包に殺された。

神余光弘の臣。光弘を殺して領地を奪い、後に里見義実、に滅ぼされた。

神余光弘の妾。山下定包を通じて光弘を滅ぼし、定包の妻となった。後に義実、に捕

えられて斬られ、怨念が里見家に祟った。

醇朴な農民。山下定包を討とうとして、誤って神余光弘を殺した。

神余光弘の臣。光弘滅亡の後、は里見義実、に従い、山下定包を討って亡君の仇を報じ、

自殺した。

里見義実の妻。上総国椎津の城主万里谷入道静蓮の娘。伏姫・義成の母。

義実の娘。

里見治部少輔義成
（さとみ じぶのしょうぶ よしなり）

金碗大輔孝徳
（かなまり だいすけ たかのり）

蟹崎十郎輝武
（あまざき じゅうろう てるたけ）

大塚匠作一成
（おおつか しょうさく かずもり）

大塚番作三戌
（いねづ かばんさく みつむし）

手束
（たつか）

大塚信乃戌孝
（いねづ かし の もりたか）

大塚墓六
（おおつか かりくろ）

棟助
（ねがすけ）

○大川莊助義任
（いねかわ しょうすけ よしとう）

浜路
（はまじ）

義実の子。

金碗八郎の子。富山で八房を銃殺し、誤って伏姫に重傷を負わせた。出家して、大法師と号し、行脚して八犬士を捜し集める。

杉倉氏元に属して麻呂信時を討った。後に主命によって伏姫を富山に尋ね、谷川で溺死した。蟹崎十一郎輝文の父。

足利持氏の臣。持氏の子春王・安王を奉じて結城に籠城した。城が陥るに及んで、

村雨丸の宝刀を一下子番作に託した。

大塚匠作の子で大塚信乃の父。村雨丸を信乃に託して自殺した。

番作の妻。信乃の母。結城方の井丹三直秀の娘。

大塚匠作の娘。番作の異母姉。信乃の伯母。墓六を入夫とした。

大塚番作の子。幼名信乃。八犬士の一人。

龜篠の夫。武藏国大塚の村長となり、村雨丸を番作から奪おうとした。後に姫上宮六に殺された。

大塚の農民。八犬士の一人犬飼現八の父。

伊豆北条の莊官大川衛二則任の子。父が歿した後、母と共に流浪し、墓六の下男となつて額蔵と呼ばれた。八犬士の一人。

墓六の養女。武藏国煉馬家の臣犬山道策の娘。八犬士の一人犬山道節の異母妹で、

大塚信乃の許嫁。

目 次

解 説

凡例・編集付記

話の筋(第一巻の分)

主要人物一覧(第一巻の分)

南総里見八犬伝(一)

八犬士伝序

有像南総里見八犬伝 肇輯総目録

肇輯卷之一

第一回

すあもとをしへ
季基訓を遺して節に死す
さしはさ
白竜雲を挟みて南に帰く

第二回

一箭を飛いっせん とばして俠者白馬を悞けうしや あやまつ
両郡を奪ふて賊臣朱門に倚よる

三

肇輯卷之二

第三回

景連信時暗かげつらのぶときあん よしさね こぼに義実を阻こぼむ
氏元貞行厄うちもとさだゆきやく たてやまに館山に従ふ

四六

第四回

小湊こみなとに義実義を聚あつむ
笹内さきのうちに孝吉讐たかよしあたを逐ふ

五九

肇輯卷之三

第五回

良将策はかりごとを退しりぞけて衆兵仁しゆへいを知る
靈鵠書いへはなを伝つたへて逆賊頭かきうべを贈る

八三

第六回

倉廩さうりんを開ひらきて義実二郡よしさね にぎはを賑にぎす
君命きみめいを奉うけたまはりて孝吉三賊たかよし ちうを誅ちうす

一〇五

肇輯卷之四

第七回

景連奸計信時かげつら のぶときを売うる
孝吉節義義実たかよし よしさねに辞やす

一一六

第八回

行者の岩窟に翁伏姫を相す
滝田の近邨に狸雛狗を養ふ

一三

肇輯卷之五

第九回

盟誓を破て景連両城を困む
戲言を信て八房首級を献る

一六

第十回

禁を犯して孝徳一婦人を失ふ
腹を裂て伏姫八犬士を走らす

一六

八犬士伝第二輯自序

南総里見八犬伝 第二輯総目録

第二輯卷之一

第十一回

仙翁夢に富山に葉す
貞行暗に靈書を献る

一九

第十二回

富山の洞に畜生菩提心を発す
流水に訴て神童未来果を説く

二〇

第二輯卷之二

第十三回

尺素を遺て因果みづから訟
雲霧を払て妖孽はじめて休

.....二二九

第十四回

轎を飛して使妾溪澗を渉
錫を鳴して、大記給を索

.....二四三

第二輯卷之三

第十五回

金蓮寺に番作鱗を撃つ
拈華庵に手束客を留む

.....二五五

第十六回

白刃の下に鸞鳳良縁を結ぶ
天女の廟に夫妻一子を祈る

.....二六九

第二輯卷之四

第十七回

妬忌を逞して墓六螟蛉をやしなふ
孝心を固して信乃瀑布に褻す

.....二九〇

第十八回

簸川原に紀二郎命を隕す
村長宅に与四郎疵を被る

.....三〇四